

清酒「魚沼」

佐藤 紀子 カナダ

「二重顎になるまで顎を引け」と聞く猫背を直す方法として
シャッターを下ろして人の気配なしパブロン・ゴールド売りとるし店
ひっそりとカナダの酒屋に並べらる四合瓶の清酒「魚沼」
遠き地に知人と遭へる心地して「Japanese Sake」魚沼」を買ふ
PCの顔認証は動じない 舌を出しても笑ひこけても

「なにげに」

中津川 靉 坐 埼玉

何気なくみた広辞苑「なにげに」にわが日本語はあへなく旧ぶ
十日月は都庁舎を越ゆスタンドオフ松田力也がみごとと蹴つて
木屋町の小闇にあらん小春日に脱いでわすれた青いセーター
桜ちる夜のしじまにこゑきこゆ爆死せし児の泣き声きこゆ
紺色の万年筆をむねに挿す五月の風を書きとめたくて

夫婦は二つ

椎 名 恵 理* 千葉

アボカドをゆったり握る左手に鼓動ひくりと受ける心地す
罹患率ネットで調べいるときの人工芝の眩しい緑
中指の先のひび割れ人はみな急にがらんと変わってしまう
新しいシングルベッドを二つ買い良くも悪くも夫婦は二つ
物置きで迷子のままの金魚鉢この夏みつかるような気がする

胃もたれ

印 出 美由紀 神奈川

二、三尾の鱧きりの魚影のやうな雲ひきて夜明けの空は遠浅とほあさ
舌平目の腹のやうなる雲もゐて風待月の朝は明けゆく
液晶に書いたサインは液晶に息づきはじむミトコンドリアめき
内職の画面を起動せしまに曇り日ひと日胃もたれのあり
ひと夜咲き萎るるきはの月見草のいつはりのなき黄の色想ふ

マウスを握る

黒 田 亜 希* 東京

紫陽花と書けば女優の佇まい醸して雨に映えるアジサイ
旧時代の女性らしさを想起する紫陽花 ジェンダーレスの社会で
常にドア開けっぱなしの社長室モニターの陰に居るのは見える
オープンな社長オープンな社長室オープンの陰に居るのは見える
身のうちに元気の素が何もない透明な手でマウスを握る

マヨネーズ

内 山 真由美 新潟

シャンプーを流した後にシャンプーを手取るほどにツカレマシタワ
タブレットと教科書入れたランドセル背負ふ子どもの身体が軋む
口元に手をやる仕草多くなりマスク暮らしの名残りと思ふ
星形の洞はあるのに星を生むことは叶はず嗚呼マヨネーズ
身を振り倒れたままのマヨネーズため息のごと空気孕みて

シモダマイマイ

森田則子 三重

耳底の蝸牛くわぎゅうが二匹もそもそと動き出したり入梅ついでりの報に
わが耳にこもりて老ゆるかたつむり螺旋の管の水を震はす
でで虫の人に聞こえぬ鳴き声を枇杷の実が聞く桑の実が聞く
黒船にペリーが乗せて帰りたるわがふるさとの（シモダマイマイ）
戦争に取られず済みぬ夫も子も 孫の明日にも難のあらずな

日本茶のカフェ

才野 洋 京都

わが町の朝に野鳥の声あふれ千年前の森の朝とも
コーヒーを楽しむ朝の静寂を破り緊急地震警報
はつ夏の川のほとりに客席が二つしかない日本茶のカフェ
夕風に紙垂しで吹かれつつ開演を待つ能舞台はつなつの宮
漆黒の夜空に走るいくつもの真白き鱗よ「土蜘蛛」の糸

アボジとオモニ

康 哲 虎* 兵庫

泣き虫の僕に泣くなと言わないで育ててくれたアボジとオモニ
泣き虫の私はきつと弱かったところが一番いい人だった
あてはまる言葉はあるが本当の気持は君に伝えられない
病院の就業規則を破らないあなたそのままできてほしかった
何人も人を殺してはいけません令和もつづく死刑執行

メモる

則 武 博 子 兵庫

手のひらに豆腐切ると亡き夫はわれをやさしく叱りてくれき
できる家事は半分減り為す時間三倍に増ゆもうすぐ卒寿
遠からぬ自が弔ひの費用など葬儀セミナーで子細にメモる
不機嫌がフキハラとなる今の世は被害妄想気味にあらざや
親指と人差し指で拵げたし瑣事にこだはる今日のころを

桜鯛

宮 本 君 子 広島

わが喜寿に誰も気づかぬ春夕べ黙つて美しき桜鯛焼く
大根の花に飽きたか紋白蝶ふいに日傘のわれにまつはる
土手を這ふ昼顔はうすもいろの顔をいくつもひらきてしづか
令和の世雨乞ひなどはしなないけど茅の輪をくぐるいと神妙に
真夜中の雨音は遠き人の声みに残れるさよならさよなら

父の日

大 西 晶 子 福岡

明治に生れ大正昭和を生きた父「父の日」などを知らず逝きたり
香の高き花を好みし父なりきクチナシ咲けば自室に活けて
エメンタールチーズのやうな今日のわれやることなすこと手違ひばかり
父の日を祝ふ黄色の薔薇の花さがせどあらず早や売り切れと
父の日の夫へ子から教へ子から届く噛まずに食べられる品